

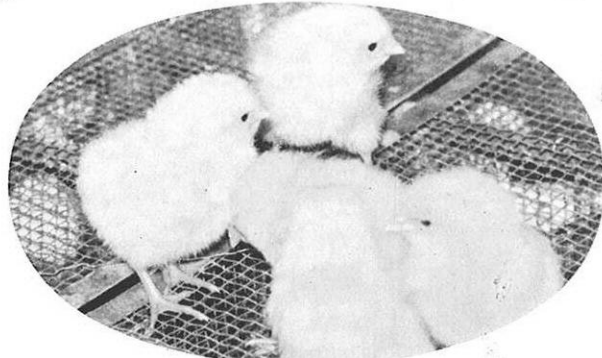
☆☆☆
種鶏の改良繁殖や育成など養鶏のセンターとして、さる4月11日、玉名市に熊本県種鶏場が店開きをしました。以下はそのスナップ……



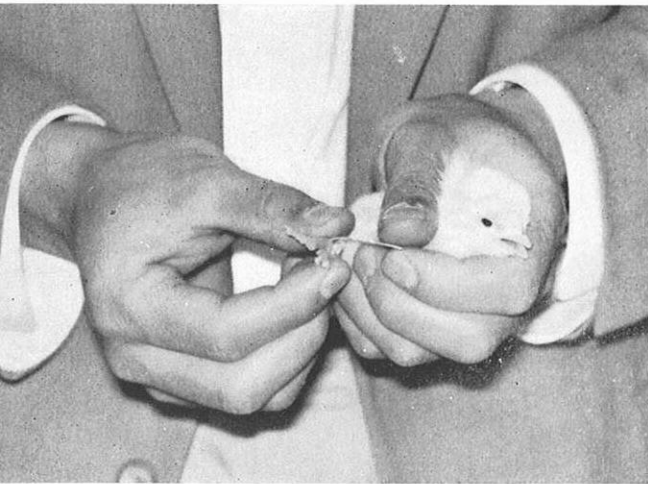
★ ↑ 種鶏場の全景 ★



★ ↑ 明るい鶏舎の庭



★ ↑ かわい、ヒヨコたち ★

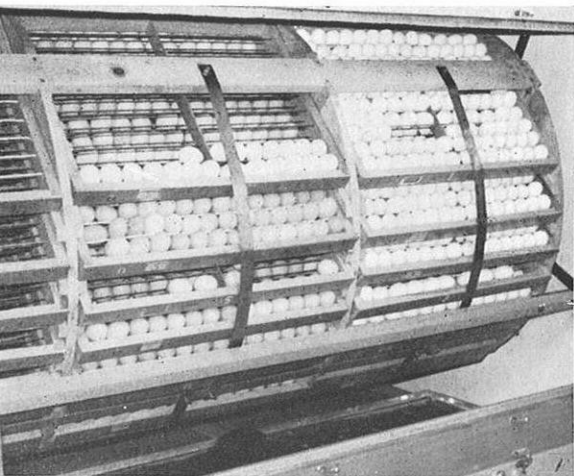


★ ↑ 血統の標識になる脚帯がつけられる



← 雌雄器械による鑑別

↓ 種鶏舎の内部、上部には産卵箱がある。



↑ 立体式電気ふ卵器（マスターピース）……1万個の卵が入るこの器械が2台ある。★

＜施設訪問＞ 熊本県種鶏場

保健婦は動く保健所
保健婦と一口にいつても、その仕事の範囲はなかなか広い。母子衛生、伝染病予防、結核予防、性病予防、成人病、家族計画、生活環境の衛生、衛生教育その他公衆衛生の各分野にわたっており、いはたかも「動く保健所」といわれていられるように、千手観音のような働きが要求される。
保健婦はいろいろな場所で勤務している。保健所、療養所、病院、町村といったふうにあらゆる社会階層に、各種の活動を提供するわけだから、そのため身に備えなければならない技術も多岐多様にわたるわけである。
現在、県下で活躍している保健婦の数は約二〇〇名。
計画出産も軌道に
球磨郡山江村駐在の西あさかさんは、

この村の担当になってから十二年。まずはじめに西さんの日課からのぞいてみよう。
西さんは仕事柄殆んど歩きの日が多い。平均して月に二十日ぐらいは家庭訪問である。その他は定期的な小、中学校を巡っている。
家庭訪問だが、何といっても育児指導が一番多い。山江村に生まれる赤ちゃんは年間百五十名を上まわり比較的出生率が高いといわれている。四年前から西さんの指導で主婦たちの家族計画の研究グループができて、関心も大分高まってきた。しかし、辺地ではまだまだ意識が低いので実地指導にはさらに力を入れているという。
妊婦の保健指導では、健康診断を励行するように奨めたり、特に栄養指導には保健所の栄養指導員や生活改良普及員や婦人会と協力してやっている。又山森が八五〇というこの村では、婦人の山仕事が多く、妊婦の労働時間の軽減や摂生については家族の理解が必要だが、西さんはその説得に相当骨を折っている。
結核や成人病の対策も
次に多いのが家庭で療養中の結核患者の指導だ。農村では、この種の患者で、治療だけに頼って安静を軽視する傾向がある。特に安静度を保つため保健所や病院と連携し、とりながら細かい面にわたって指導している。それに療養食の指導や精神療法―患者と家族との気分的な調和をはかる―にも気を使っている。さらに入院できない患者のための手続き（例えば入院できない患者のための医療

保護の手続きや、化学療法剤の申請など）や、床づけをしないように方法を講じたり、衣類、布団、住いにわたって感染予防の方法を家族に実行して貰っている。
こういった結核患者のほかに、成人病といわれる、高血圧症、糖尿病、中風などの人たちについても、摂生をするよう注意を促したり、保健所の栄養士と相談して献立表による食事療法等も指導して貰われている。
PRによる健康診断の励行
以上のような家庭での看護、療養指導のほかに、保健婦の仕事はさらに日常の保健衛生指導という面へも拡がる。
まず、村の人たちに健康診断を必ず受けるようにすすめている。簡単なことのようにだが、忙しい農村ではなかなか実行されにくいことだ。特に、結核予防を目的とした一般住民健康診断として、保健所では年一回レントゲン車による一斉診断を実施しているが、事前には村の広報紙でPRを行ってみんな参加できる態勢をとるようにしている。
又、成人病は特に農村に多いといわれている。高血圧患者のための血圧検査も今年から山江村では定期的に行うことになったし今まで思うようにできなかった予防接種も励行されるようになって大助かりだといふ。

西さんは月に一回は必ず村の小、中学校をまわるようにしている。定期的に行われる学童の健康診断、寄生虫一斉検査、結核検診などの量的にも大変に手間どる仕事だ。以前は学校に養護の先生がいたが、現在は村の予算の都合で専ら西さんの受持ちということになっている。
泊りがけの辺地訪問
西さんの活動は、仕事の範囲が広いため次のような場合には重点的に地区の衛生組織と連携し、結核検診の結果、特別な対策を考えなければならぬ時、又、春と秋の乳幼児健康診査にちなんで行う育児指導の時など。山江村は山間地と平地に分れているので、平地地の指導は農閑期に、山間地の指導は山仕事で忙しい頃、つまり平地地の農閑期にというふう交互に計画性をもつて行われている。辺地まわりは、自転車で行かなくては泊りがけになるのが普通だが、西さんのくるのを長く待って待つて、くれないので疲れも忘れてしまう。山仕事の人たちの生活収入は時期が決まっているので、治療に事欠く家庭が多く、役場へ乳幼児のミルク代の世話をしあけることもたび々だといふ。
西さんの喜びといえは、育児指導がうまくいって赤ちゃんがすくすく成長している時、結核検診の成績が予想以上に良かった時などである。
忙しい仕事の余暇を縫って、西さんは毎月一回開かれる管内の保健婦研修会のはか、年二回県の研修会に出かけている。さらに役場の温い配慮で九州地区看護会へも毎年出席させて貰っている。
今日も西さんは、愛用の自転車に訪問靴を積んで部落から部落へとまわっている。

（衛生報部）



△母子と語る西さん(右)▽

“保健婦”
第一線の人びと <5>